

特集

DNP の理念と実際

専門看護師をさらに育てる博士課程教育

専門看護師として活躍する修了生から、「専門看護師の6つの役割の中で、研究が一番できていません」という言葉を聞くことがある。この言葉には、現在の専門看護師における研究と臨床との関係が反映されているように思う。

専門看護師としての活動は、現場から学び、既存の知識を活用することで精一杯な状況から始まる。動けるようになったら、よりよい実践をめざして既存の制度やエビデンスを最大限に活用したいと思い始める。実践が効果を生み出すようになると、新たな制度や技術へのアクセスの方法や知識が必要になる。病院というコミュニティを視野に変革に取り組み、地域のコミュニティ、そして行政まで見渡せるようになってからは、いまあるエビデンスをどう活用し、より説得力ある活動ができるかが焦点となっていく。そして自身が新たな制度に貢献するために、研究という方法が切実に必要となる。

そのように専門看護師の成長と、さらに必要な知識について考える中で、われわれはDNPというモデルに出会い、さらに教育課程の新設を検討することとなった。DNP (Doctor of Nursing Practice) は、NP (Nurse Practitioner) や CNS (Clinical Nurse Specialist) 等の APN (Advanced Nurse Practitioner) が台頭する米国で生まれた博士号である。この資格の誕生の経緯やカリキュラムを学ぶ過程で、米国で発展してきた APN の高度実践が博士課程にさらに求めたものが示されていると感じた。本特集の Dr. Yeo, Dr. Scott らの論文からは、米国 APN 教育の理想と現実をみることができる。米国の DNP コースで学ぶ石田氏からは、NP としての活動への期待がいきいきと伝わってくる。宇都宮氏からは、専門看護師としての活動と教育を両立している立場から、専門看護師教育にさらに必要な要素が指摘されている。聖路加国際大学大学院では、DNP ワーキンググループと Dr. Yeo とで集中的にカリキュラムを検討してきた。新福氏らと吉田氏らの論文には、その経緯と、われわれが学び、構築したわが国の DNP 教育モデルが詳細に示されている。

看護研究の専門誌である本誌でこの特集を企画した意図は、DNP コースのカリキュラムが、実践と研究との近い関係性を志向していると考えたためである。上級実践を極めようとするとき、どんな知識を、そして研究の活用と実践に関するどんな能力を修士課程修了生に付加することが求められるのか。それをどうトレーニングしていくか。これらは、実践の科学である看護学の発展と研究との連動を知る上で、非常に本質的な議論だと考える。わが国の看護学研究が実践の水準を高めるものになっているか、なっていくことができるか。大学院でそのための力をどう育むのか。DNP の教育課程の検討プロセスから、研究力を育む専門看護師の大学院教育について考えたい。

企画：萱間真美(聖路加国際大学大学院看護学研究科長、教授)